

い、回収し、会場で披露するという、会場に意見参加を促す新しい試みもなされました。

第1部の西川先生の講演内容と第2部のパネルディスカッションのパネリストの方々の意見には、「生命の再生産」「社会の再生産」「経済・資源蓄財の問い直し」「循環・持続可能性」「モラルエコノミー・エコロジー」そして、「知ること・行動すること・人とつながること」「内発的学び(ラーニング)」という諸々のキーワードが重なり合っていました。第1部の講演の最後に、西川先生は、グローバル教育はどの方向を目指すのかと会場に問いを投げ

かけましたが、第2部のパネルディスカッションでのパネリストたちの意見を総合することで、西川先生が問いかけられた「危機の時代のグローバル教育」が目指すべき方向性というものを、会場の参加者たちは其々確信したのではないかと思います。

ポスト開発時代に入ったといわれる今こそ、グローバル教育には、市民として目覚め、内発性による社会発展を進める学びを広げ、国の行く末を決める主権者の育成という役割が求められているといえるでしょう。

内地留学を終えて



平成23年度前期ポルトガル語内地留学生
大田原市立佐久山小学校 教諭

小島 俊子

「日本語教育とは何か。」「ポルトガル語とはどんな言葉なのだろうか。」

内地留学に行かせていただくことになったものの、これまで自分が関わってこなかった分野の研究に対して不安な気持ちのままのスタートとなりました。

内地留学では、宇都宮大学で講義を受けたり、栃木県国際交流センターでポルトガル語を教えていただいたり、県内の日本語教室を訪問させていただきました。研修の中で本県における外国人児童生徒教育の現状や日本語教室の実際を知り、外国人児童生徒に携わっている先生方、そして、そんな先生方を支えている関係者の皆様、HANDSプロジェクトの皆様のお仕事や御苦労の一端を知ることができました。また、ポルトガル語の習得と併せて、ブラジルの文化や国民性についても触れることができました。自分が学んだこと、体験したこと、触れた言語や文化はどれもとても新鮮なものでした。それらを知ることができ、今までに考えたこともなかった世界があることに気がきました。そして、自分がいかに狭い世界、そして狭い視野の中で生活していたかということを実感

しています。

研修中時折、かつて担任したことのある一人の外国人児童を思い出していました。日本のことを何もわからないまま、転入してきたその児童。笑顔を絶やさなかった彼の面影を思い出しつつその境遇を思うとき、分からない言葉を話す人たちの中で、どれだけ不安な気持ちで1日1日を過ごしていたのだろうと今更ながら心が痛みます。その子に寄り添っていたつもりだったけれど、ふり返ってみるとっと適切な支援があったのではないかと反省するばかりです。そして、今の自分ならどう接することができるだろうかと考えずにはいられませんでした。

様々な方々のお力添えのもと、無事に内地留学を終えることができました。今回の研修で学び得た知識と貴重な経験をどのように生かしていったらいいかということが自分の課題となりました。より広く様々なことに積極的に目を向けることを忘れずに、まずは目の前の子どもたちを精一杯支援していきたいと思います。